

# 時代は変わる

校長 西藤昌裕

一昨年度・昨年度と、現在の浜高生が使用している『現代社会』・『世界史B』教科書（東京書籍発行）の本文中の記述を拾い上げて時代を振り返る略年表を作成し、生徒会誌『汐里』に掲載した。そこでは、「私が浜高の生徒だった時代は、文字通り日本のそして世界の変革期であった。」と記した。

本年度は、当時と現在の世相、当時と現在の高校生の生活実態を比較するための略年表を作成（★は事件、①～⑥は書籍・TV番組・音楽・映画など）した。

## 【昭和47（1972）年】

- ①「結婚しようよ」（よしだたくろう）が発売（1月）
- 満開の桜のなか、浜高に入学（4月）
- ★沖縄復帰（5月）
- ②『ジギー・スターダスト』（デビッド・ボウイ）が発売（6月）
- ③『日本列島改造論』（田中角栄、日刊工業新聞社）が刊行（6月）
- ④「学生街の喫茶店」（ガロ）が発売（6月）
- ★日中共同声明、日中国交正常化（9月）
- ⑤『ブラックジャック』（手塚治虫、少年チャンピオン）が連載開始（11月）

## 【昭和48（1973）年】

- ①「僕の贈り物」（オフコース）が発売（2月）
- ②『箱男』（安部公房、新潮社）、『日本沈没』（小松左京、光文社）が刊行（3月）
- ③「20世紀・ボーイ」（T・レックス）が発売（3月）
- ④「神田川」（南こうせつとかぐや姫）が発売（9月）
- ★第4次中東戦争が勃発、第1次石油危機により世界経済に大打撃（10月）
- ⑤『ひこうき雲』（荒井由実）が発売（11月）
- ⑥『ノストラダムスの大予言』（五島勉、祥伝社）が刊行（11月）
- ★江崎玲於奈博士、ノーベル物理学賞を受賞（12月）

## 【昭和49（1974）年】

- ①『燃えよドラゴン』が大ヒット、カンフー映画がブーム（1月）
- ②『アルプスの少女ハイジ』のTV放映が開始（1月）
- ③「精霊流し」（グレープ）が発売（4月）
- ④『月の光』（富田勲）が発売（9月）
- ⑤『宇宙戦艦ヤマト』のTV放映が開始（10月）
- ⑥「キラー・クィーン」（クィーン）が発売（10月）
- ★プロ野球巨人軍V10ならず、長嶋茂雄選手が引退（10月）
- ★戦後初のマイナス成長、高度経済成長が名実ともに終焉

## 【昭和50（1975）年】

- ★山陽新幹線が全線開通（岡山・博多間の営業開始）（3月）
- 浜高を卒業、大学入学のため寝台特急出雲で上京（3月）
- ①『SONGS』（シュガーベイブ）が発売（4月）

45年前の高校生の生活は現在とは大きく異なっている。何より、当時の高校生にとって夢の製品であったモノを、現在の高校生は当然のように手にしている。身近のモノでいえば、DVD、CD、WALKMAN、SMARTPHONEなど。VTRも家庭には殆ど普及していなかったし、カセットテープレコーダーは高校生にとって憧れの電化製品だった。逆に当時は在って現在にはないものだってある。僕らの時代は浜田には映画館が3館あり、僕らの娯楽の一つは映画を観に行くことだった。

勉強の合間に、或いは勉強をしながらラジオを聴いて、僕らは邦楽・洋楽を問わず、音楽の世界に浸っていった。LPレコードは月々の小遣いで気楽に購入できるものではなく、僕らはNHK-FMのエアチェックや東京や大阪のAM放送局の電波を深夜放送で拾いながら、「oldies but goodies」な曲や「brand new single」の曲を仕入れていた。邦楽でいえば、70年代前半は、アイドル全盛期であるとともにフォークソングブームの真最中であり、ニューミュージックの萌芽が見え始めていた時代であった。「風街ロマン」（はっぴいえんど）や「ひこうき雲」（荒井由実）などは、これまで聴き慣れてきたアイドル歌謡とは異なる曲調でとても新鮮だったし、そこで描かれる世界に憧れもした。洋楽でいえば、既にBEATLESは解散していたけれど、ジョン・レノンが歌う「imagine」の詞には、当時の世相の影響もあり共感するところ大だった。また、「学生街の喫茶店」（ガロ）の詞には「片隅で聴いていたボブ・ディラン」とあるけれど、吉田拓郎がラジオの深夜放送で熱心に紹介していたことにより、僕らの多くも「遅れて来たディラン崇拝者」となり、「BLOWIN' IN THE WIND」や「THE TIMES THEY ARE A-CHANGIN'」を口ずさんでいた。この時代を象徴するデビッド・ボウイやマーク・ボランが僕らのスターであった。

映画はこの頃は斜陽産業で、日本映画界は苦境に陥っていた。大人たちは、渥美清主演の「寅さんシリーズ」や高倉健主演のヤクザ映画に熱狂していたようだが、僕らは、時折学校で配布された学生割引券を利用して、専らハリウッド映画を観に行っていた。『十戒』や『ベン・ハー』といった、現在も世界史図説に掲載されている大作のリバイバル上映を、浜田の映画館の大きなスクリーンで友人たちと観た記憶がある。また、山陰でもTVの地上波放送の5チャンネル化が進み、僕らは週3回の民間放送の映画番組枠を通じて、多くの過去の名作映画を観た。VTRがない時代、親子・兄弟間でのチャンネル権争奪も激しく、「勉強時間をこれだけ確保しているのだから、この映画は是非とも観させてほしい」と家族に懇願していたのも、現在となっては懐かしい思い出である。

時代は大きな転換点であった。「巨人、大鵬、卵焼き」のことばで特徴付けられる高度経済成長期が、第一次石油危機の結果、あえなく終わりを告げ、日本経済は長い低迷期に入った。永久に勝ち続けると思っていた巨人軍の連覇がV9で終了し、昭和50年には「広島カープ初優勝」という想像だに出来なかったことが現実のものとなった。

時代は変わる。そして人も社会も変わっていく。しかしながら、変わらないものもある。歴史と伝統に裏付けられた浜高生のスピリット（精神、魂）もそうだ。浜高生のみんなには、僕たちがそうであったように、在学時も卒業後も「高い理想」を掲げ、その実現に向けて「誠実な努力」を重ねてほしい。そして、21世紀の主役となる君たちには、地域・国家・世界の抱える様々な課題の解決を目指して、ずっと頑張り続けてほしいと心から願っている。

（浜高生徒会誌巻頭言、ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞した平成28年12月記）